

葛谷栄一の 異見私見



面に出したレジャー農園を訪問した。そこが経営するワイナリー兼レストランで昼食をとったが、隣の席で食事をしていた

3年ぶりに台湾に足を運んできた。台中の新都市開発等の目覚ましく発展する姿を多く目にしたことも確かであるが、あらためて台湾と中国、香港、マレーシア、シンガポール等の周辺諸国、中国語文化圏の交流拡大・深化を強く印象づけられた。

台湾の北東部にある宜蘭県で農業体験を前

東アジアで活発化する農業・農的交流

ユーラルした本格的なものであるが、食事等で同席することはなかったものの、同じ日に宿泊していたのはシンガポールからのお客であった。

このようにマレーシアやシンガポールから台湾を訪れる人は多いが、最近では台湾に通過

勿論、台湾で彼らが行う農業は専門的な大規模なものではなく、週末農業的なものと思われるが、観光のレベルを超え、国境を越えての農業交流が進んでいることに注目したい。

そして同じ宜蘭県で農業を営む頼青松さんにお会いしての話である。前回は大きく加速したとい

て農業をする人が増えているという。農地の権利関係等は確認できなかったが、ごく近い先祖が台湾から外に出て、台湾との縁がそれなりに続いているのである。特に農地がほとんどないシンガポールから来る人たちの増加が目につくという。

頼さんは7ha弱の水田を耕作する農家であるが、日本に帰算する年半滞在した経験があり、その中の1年は生活クラブ生協で研修しながら、さまざまの実務・活動を体験してきた。この経験を踏まえて予約購買をもとにしての計画生産をベース

る。頼さんは7ha弱の水田を耕作する農家であるが、日本に帰算する年半滞在した経験があり、その中の1年は生活クラブ生協で研修しながら、さまざまの実務・活動を体験してきた。この経験を踏まえて予約購買をもとにしての計画生産をベース

に環境にやさしい農業経営を展開する一方で、日本での活動体験を本にして出版した。頼さんが基本としているCSA（地域支援型農業）に共感する人たちは次第に増えてきたが、中国でのメロミン混入粉ミルク事件の発生がこれを大きく加速したとい

前から個人での行き来も自由になり一段と活発化する中国との交流が重なってチームツアーも可能となったことから、CSAを軸とした中国との交流・活動に力を入れている。交流をすすめる中で頼さんが実感しているのが、中国でのIターン、Uターン、

(農的デザイン研究所代表)